

## 科学技術と知の精神文化

講演録 39-1

### 人文学のための弁明（アポロギア）

東北大学教養教育院総長特命教授  
東北大学名誉教授

野家 啓一

2016年3月16日

## 「科学技術と知の精神文化」研究会

### 講演録の発行にあたって

---

世界的に大きな時代の転換期に直面している現在、日本の科学・技術に携わる人々とその共同体の精神・規範・文化について、歴史に学びじっくり議論をし、将来を考える場が必要なのではないだろうか。

阿部博之 東北大学名誉教授のこのような発案により、社会技術研究開発センターは研究会「科学技術と知の精神文化」を設置し、2007年度より継続的に会を開催しています。

研究会では、学問・科学・技術を取り巻く今日までの内外の言説、活動、精神、風土などについて、理系だけでなく、科学史・哲学・歴史学・法学・政治学・経済学・社会学・文学などの多様なバックグラウンドの有識者の方々にご講演いただき、議論を深めてきました。

本講演録は、研究会での講演をもとに、講演者の方々に加筆発展し取り纏めていただいたものです。21世紀に日本の科学・技術を進めるうえで基盤となる知の精神文化について、より多くの人々が考え互いに議論を深めるきっかけとなることを願い、発行いたします。

## 目 次

はじめに	1
文系に対する逆風 ～大学改革がもたらした影響～	3
文理の区別 ～歴史的な学問の変遷～	5
科学革命 ～新しい知の台頭～	7
聖俗革命と社会技術 ～知のヒエラルヒーの逆転～	9
スローサイエンス	11
人文学の役割	13
結びに代えて	16
プロフィール	17

# 人文学のための弁明（アポロギア）

東北大学教養教育院総長特命教授  
東北大学名誉教授

野家 啓一

日時：2016年3月16日  
場所：国立研究開発法人科学技術振興機構

---

## はじめに

講演のタイトルは「人文学のための弁明（アポロギア）」としました。ここでの「人文学」は、広く人文社会科学、すなわち文系の学問一般と理解していただいて結構です。昨年、文部科学省が国立大学へ出した通知から色々な波紋が広がっており、最近では、東京大学副学長の吉見俊哉さんが『「文系学部廃止」の衝撃』という本を出されましたし、ほかにも同じようなテーマの本や雑誌の特集が出ています。私も、『現代の高等教育』という雑誌で「文系の危機」という特集がありましたので、それに書かせていただきました。その内容と今日のお話は重複すると思います。この吉見さんの本については、村上陽一郎先生が毎日新聞に書評を書いておられまして、そこに簡にして要を得た内容紹介と評価がなされています。

最初にタイトルについて説明させていただきますと、「人文学のための弁明、アポロギア」というのは、フランスの歴史学者マルク・ブロックの『*Apologie pour l'histoire ou Metier d'historien*』という有名な本から取っています。邦題は『歴史のための弁明』で、岩波書店から翻訳が出ていますが、それについて、お亡くなりになったフランス史の大家である二宮宏之先生が『マルク・ブロックを読む』という非常に優れた本を書いておられ、その中でこのタイトルについて言及されています。そこには、「現代、日常的に用いる日本語では弁明」と言い訳とか弁解のニュアンスで受け取られるかもしれませんが、しかし、もともとギリシア語のアポロギアに発する言語は、法廷など理論の場において自らの立場をはっきり述

べ、事理を明らかにすることを意味しており、それはプラトンの『ソクラテスの弁明』に見られるとおりです」と書いてあります。ですからアポロギアというのは『ソクラテスの弁明』以来の由緒ある言葉だということを述べておられますが、私が選んだ「人文学のための弁明」というタイトルも、言い訳とか弁解ではなくて、事の事理を明確に主張するという、そういう意味で付けています。

問題の発端は、2015年の6月8日に当時の下村文部科学大臣の名前で各国立大学学長に宛てられた通知です。「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」というものですが、その中に、これもマスコミで盛んに取り上げられましたが、「特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする」という文言がありました。これが、いわば文系つぶしだとか文学部廃止論だとかいうことでマスコミに取り上げられることになったわけです。ただ、そのあと経団連からもこれに対して、経団連が求めているのはそんな即効的に役に立つ人材ではなくて、もっと幅広い教養を持った人間が経済界には欲しいのだというコメントを出したので、文科省もこの組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換というのは教員養成系学部・大学院について言ったことで、人文社会科学系学部・大学院についてはそれに当てはまらないという弁解を、それこそ言い訳をしたわけです。どうして文科省のようにこの文章が読めるのか、私は今もって分からないのですが、ともかく、それ以外に日本学術会議でも反対声明を出しましたし、さまざまところでこの人文社会科学の在り方ということが話題になりました。それ自体は、悪いことではないと思うのですが、今日はそのことを、少し歴史的な経緯を踏まえながら、今後の人文社会科学の在り方というようなことについてお話をさせていただきたいと思います。

## 文系に対する逆風 ～大学改革がもたらした影響～

今回の教員養成系、あるいは人文社会科学系の縮小という話は急に出てきた話ではなくて、ここ 10 年、20 年の大学改革の 1 つの帰結だと思っています。新自由主義的の大学改革という動きがありましたが、基本的には規制緩和と市場原理というか競争原理の導入ということを中心とした政策転換の中に出てきた話で、レーガン、サッチャー、中曽根というそれぞれの政権が掲げた政策です。日本では分割民営化という形で、それまで国営であった国鉄、電電公社、専売公社が民営化された流れの中で、国立大学も国家公務員の削減という大命題があり、その実現の一環として国立大学法人化という路線が浮上してきたわけです。

ただ、その布石は、1990 年代に入ってから少しずつなされてきました。その一つが、大学設置基準の大綱化という、要するにカリキュラムを各大学が自由に編成していいという規制緩和の実施です。これ自体は大変結構なことなのですが、それが引き金となって、結局、全国の教養部廃止につながっていきます。それから次が 90 年代に行われた大学院の重点化、いわゆる大学院大学化ですが、これによって大学院の定員が大幅に増加したわけです。そのことが、今になってみると人文社会系の大学院にボディーブローのように効いてきていると感じています。総仕上げは 2004 年の国立大学の法人化、遠山プランに従った改革です。基本線は運営費交付金の削減ということで、効率化係数 1%がここ 10 年続いていますからもう 10%も削られたこととなります。

それからグローバル COE をはじめとする競争的資金の導入ということが、その後大学に大きな影響を与え続けているわけです。ちょうど今、国立大学法人化は第 3 期のプランが策定されて、この 4 月から始まりました。それに先立って文科省から「ミッションの再定義」ということが要請されました。世界的な研究水準の大学と日本をリードする大学、それから地域の活性化に貢献する大学というそれぞれの役割を明確にして、大学の中期計画・中期目標を定めろということですが、これは結局、全国の国立大学の再編成ということにつながっているわけです。私の知っている限りでも、岩手大学などは既に文系の定員を減らして、それを社会的要請の高い分野に振り向けることを来年度の概算要求でやっています。

このように、文系に対する逆風というのは今に始まったことではないのですが、ここ十数年にわたる大学改革がどういふ変化や影響を文系の学部・大学院にもたらしているかと言

ますと、カリキュラムの大綱化というのは教養部の解体と再編につながりました。今、教養部をそのまま存続させているのは東大の教養学部ぐらいでしょうか。私立にはそういうところもありますが、国立大学で教養部を残しているのはもうごく少数になっており、それによって、文系のアカデミック・ポストが大幅に減少しました。非常勤講師への転換をすとか、あるいは私の専攻している哲学などはヨーロッパ思想や人間学という名前に変えた大学がかなり多くなり、そうすると必ずしも哲学の出身でなくても担当できるということになりました。それから、助教のポストはほとんどが3年なり5年なりの任期制のポストが増えて、結局は若手研究者の雇用の非正規化、不安定化ということにつながっています。

大学院重点化によって定員が大幅に増加した大学院は、特に文系大学院は水膨れをしたと言っても過言ではないと思います。つまり、毎年定員を満たすのに四苦八苦しているという状態で、当然ながら入学試験のレベルを落とさざるを得ません。場合によっては、文系の大学院でありながら第2外国語を課さない大学院が出てきていて、大学院生の学力低下は見るべくもないという状況になっています。それで結局のところ、大学院重点化とは言っても、定員を満たされない部分を留学生によって補うとか、そういう変則的な形で進んでいます。

これまでは、教授ポストとか助教授ポスト、今は、准教授になっていますが、それを空きポストにしてもさほど問題はありませんでした。いい人材が見つかるまで2年とか3年、空きポストのままにしてもそれほど文科省から文句を言われることはなかったのですが、それが、国立大学の法人化に伴って、ポスト制からファンド制に大きく転換しました。つまり、外部資金を持って来た場合に、その外部資金で教授を1人雇うのか、あるいは助教を2人雇うのかということになります。同じぐらいの金額だとすれば大学の選択の幅は広がったのですが、当然ながら大学は金が掛かる教授を呼ぶよりは若手研究者を任期制で呼んだほうが財政的には楽になるので、そういう方向へ向かっていきました。そして、若手研究者の使い捨てのようなことが起こっています。つまり任期制であり、その若手研究者たちはなかなか准教授、教授に上がれなくて非正規労働者化ということが進んでいます。私の知っている若手研究者でも、任期制のポストを5つも6つも渡り歩いて、ようやく准教授のポストにありつけたという方が少なからずおられます。結局、この一連の大学改革により、文系の大学院進学者が減少しました。将来が見えないということです。それにもかかわらず、やはり研究者を目指す層というのは一定程度はいるのですが、何年間か任期制のポストで我慢しなければならないポストクが増加するという、そういう状況が進んでいるわけです。

## 文理の区別 ～歴史的な学問の変遷～

社会的に有用な分野というのは理系を意味しているわけですが、今の日本ほど理系と文系という分け方を明確にしている国は世界中を探してもないと思います。歴史的に見ても理系と文系がこんな明確な形で分かれ、理系は役に立つが文系は役に立たないというような通念がまかり通っている国、あるいは時代は少なかったのではないかと思います。歴史的に学問の変遷ということをとどけてみると、アリストテレスの時代には理系と文系を分けるような分類はそもそもありませんでした。彼の学問分類の方式は、「テオーリア (theoria)」と「プラクシス(praxis)」と「ポイエーシス(poiesis)」という3分類です。テオーリアというのは、そこからセオリーという言葉が出てきますので、理論的な知識を意味します。そして理論的な知識の先端にあるものとしてアリストテレスが考えていたのが数学と哲学で、まさに文理の区別はないわけですが、これは純粋な真理の探究で、エピステーメと呼ばれていました。

プラクシスというのは実践的な知識です。現在で言えば社会科学の大半がここに含まれることになると思いますが、人間の道徳的行為の探究です。その基盤になっているのはエンドクサと言われる共通の了解事項のようなものです。世の中を動かしている共通の常識のようなものです。3番目はポイエーシスです。これは製作的な知識です。現在で言えばエンジニアリング、テクノロジー、工学ですが、ギリシャ時代は芸術も含まれています。つまり劇作とか彫刻を作るとか、そういった芸術的な活動もこのポイエーシスに入っていました。一般的に言えば物の製作に関わる技術的な探究ということになるのですが、この分野は、テクネーとも呼ばれて、それが今日のテクノロジーにつながっていくわけです。

それから、こういう3分類とは違うもう1つ別の分類があります。これが今の理系・文系に近いのですが、「ノモス(nomos)」と「ピュシス(physis)」という区別がありました。ノモスというのは法律とか人為的な社会規範のことです。ピュシスはフィジックスの語源で、ありのままの自然ということです。ですからノモスに関わる学問とピュシスに関わる学問というような区別がありましたが、それは必ずしも前述の3分類とうまく交差していないというのが古代の学問観だったと思います。

その次に出てきたのがリベラルアーツです。現在は、教養科目とか人文社会系の科目をリベラルアーツと呼ぶことが常識になっていますが、もともとリベラルアーツの起源はそうで

はありませんでした。自由学芸と訳されますが、7つの科目があり、奴隷労働的な手仕事に関わらなくてもいい階層であるリベラル・シチズン（自由市民）が守るべき基本的な教養という形で、手仕事の技術とは相反するものとして考えられ、また学ばれてきたわけです。もともとの起源はマテマタというギリシア語ですが、これはピュタゴラス教団が魂の浄め（カタルーシス）のために課した学問とか学ばれるべきものという意味で、これがマスマティックスの語源になっています。音楽、天文、幾何、数論の4科目がマテマタと呼ばれていました。それがやがてアルテス・リベラーレス、つまりリベラルアーツと呼ばれるようになり、算術、幾何、天文、音楽の4科と、文法学、修辞学、論理学（弁証論）の3科から構成されていました。3科のほうは、主に言語に関わる学問です。ですからどちらかと言うと3科（trivium）のほうが文系的、4科（quadrivium）のほうが理系的な学問という分け方ができると思います。音楽と言っても音楽の演奏ではありません。楽理、音楽理論で、音楽は数学と極めて近い分野とされていましたので、4科のほうに音楽が入っています。

中世の大学では、神学部、法学部、医学部が上級3学部と呼ばれ、下級学部として哲学部あるいは文理学部というのが置かれていました。そこで予備教育としてリベラルアーツが教えられていたわけです。基本的には、学問の公用語であったラテン語の習得を目指す言語的3科が中心でしたが、算術、幾何、天文、音楽という理系の学問である4科も必修でした。これらは先ほどのアリストテレスの分類で言えばテオーリアに属し、テクネーとかエンジニアリングには関わらない純粋な、観照的な学問と位置付けられていました。ところが、12世紀ルネサンスという大きな出来事があり、そのころにヨーロッパではボローニャ大学やパリ大学、それからオックスフォード、ケンブリッジなどの大学が続々と設立されるのですが、それらを通じてアラビア科学が移入されてきます。今で言う中東地域は、当時としては学問的に最先端の知識を持っていた地域で、特に医学や、のちに化学となる錬金術、そしてそれらの学問を通じて実験的な方法がアラビア地域から入ってきます。

それまでヨーロッパの学問というのは、そういう手仕事に類した実験的な方法というものを軽蔑してあまり関わらないようにしていたのですが、12世紀ルネサンスを通じて、幾何学や論理学など抽象的な、理論的な科学と、それから医学や錬金術のような実験的な学問というものが結び付いて近代科学が成立するというのが大まかな流れだろうと思います。

それから、近代科学の成立過程でも、やはり学問の中に自然哲学と自然史（ナチュラル・フィロソフィーとナチュラル・ヒストリー）という大まかな区別はありました。自然哲学のほうは、普遍的な法則の探究で、ニュートンの『プリンキピア（自然哲学の数学的原理）』はどなたもご存じだと思います。ボイルには『懐疑的化学者』という著作があります。今で言う物理とか化学が自然哲学の中心を成していました。生物学とか地学は自然史（博物学）と呼ばれて、こちらのほうは統一的な普遍的法則よりは多様性の探究を目指し、記載と分類という方法によって自然界を構成するさまざまな事象を記述していきます。一番有名なシステムがリンネの『自然の体系』とか『植物の種』で提示された属名と種名で表示する植物分類法です。それからビュフォンの『自然誌』も知られています。その後、ヨーロッパの学問の展開の中では、ニュートンの『光学』とゲーテの『色彩論』が同じ光を扱いながらも対照的な位置にあります。ニュートンの『光学』のほうは自然哲学、ゲーテの『色彩論』は自然史のほうに属するという方法論上の違いがあったわけですが、近代になると、この自然哲学の方が一挙に前面に出てきます。

## 科学革命 ～新しい知の台頭～

ルネサンスを経て、16世紀の半ばから17世紀にかけて、それまでのアリストテレス的世界像、アリストテレスの天文学や自然学、そういったものに対して新しい知というのが出現します。それを「科学革命」と普通呼んでいるわけですが、この辺は全部、村上陽一郎先生の『西欧近代科学』という本から学ばせていただきました。ケプラーには『新天文学 (Astronomia nova)』、フランシス・ベーコンには『新オルガノン (Novum organum)』、それからガリレオには『新科学論議 (Discorsi e dimostrazioni matematiche intorno a due nuove scienze)』という著書がありますが、nova、novium、nuove と、全部「新しい」というタイトルが付いています。それが旧来の知とか学問、アリストテレスに代表されるような旧来の学問に対して新しい学問としてクローズアップされてくるのが、だいたい16世紀半ばから17世紀でした。

これを基盤に西欧近代科学というものが体系化されるわけですが、当然、新旧の論争が行われます。ただ、この場合に旧のほうに属するのはむしろ人文学に近い学問、つまり神学、哲学、歴史学とかそういったものが旧来の知を代表していて、それに対して先ほどのケプラ

一とかガリレオによって新たに開かれた学問が新科学と呼ばれたわけです。それについてパスカルはその両面を知っていた人です。パスカルは哲学者であると同時に自然科学者でもありましたので『真空論』を書いています、その序言が遺稿として残されています。これは17世紀の半ばに書かれたものと推定されていますが、そこに次のような言葉があります。

「歴史とか、地理とか、法律とか、言語とか、とりわけ神学とかいうような、著者たちの書いたことを知ろうとして探求すればよいような問題、要するに、単純な事実か、聖俗の制度かをその原理としているような事柄においては、それらについて知りうることはすべて書物に含まれているので、それらの書物に助けを求めることがどうしても必要である。したがって、それによって完全な理解を得ることができ、それに何もかも加えることはできない。」(『真空論序言』、『パスカル全集』第一巻所収、前田陽一ほか訳、人文書院、1959)

つまり、旧来の知といいますか、人文学については書物が最高の権威になっているので、特に神学なんかは聖書という典拠があるわけですから、それに新たに加えてはいけないということが原則になっていると言っています。ところが17世紀に出てきた新しい知、ニューサイエンスについては、次のように述べています。

「同様なことは、感覚や推理のもとにある問題については言われぬ。そこでは権威は無用である。それらは理性によってのみ知られるべきものである。権威と理性とはそれぞれ違った権利を持っている。前の場合には権威がだんぜん有利であり、後の場合には理性が代わって支配する。(中略)このように、幾何学、算術、音楽、自然学、医学、建築学など、実験と推理のもとにあるすべての学問は、完全になるためには増し加えられなければならない。」(同前)

このあとでパスカルは、この知識を増し加えるためには実験が必要だということを述べているのですが、17世紀半ばという時代を考えれば、パスカルは理系と文系の学問の違いというものをかなりよくわきまえていたと言えると思います。ただ、パスカルにとっては、神学なども重要な学問でしたので、どうにかしてこの新しい知識、つまり理系の学問とそれまでの旧来の知識、つまり文系の学問を調和させるということが彼の課題だったわけです。それについては次のようなことを述べています。

「このような相違が明らかになれば、自然学的問題における論拠として、推理や実験の代わりに権威のみを持ち出す人々の盲目をあわれまざるをえなくなり、また神学において、聖書と教父たちとの権威の代わりに、推理のみを用いる人々の悪意を恐れざるをえなくなる。自然学において何事をも発明しようとしないう臆病な人々の勇気を鼓舞し、神学において新説を生み出そうとする無謀な人々の高慢を困惑させなければならない。」(同前)

つまり、自然学と神学を代表とする人文学の棲み分けをパスカルは提唱しているわけで、これは少なくとも 17 世紀という時代を考えれば、かなり透徹した洞察を示した見解だと言えると思います。

## 聖俗革命と社会技術 ～知のヒエラルヒーの逆転～

その後、18 世紀に入ると、それまでの旧来の知と新たな知のヒエラルヒーが完全に逆転します。村上先生は、これを「聖俗革命」という言葉で呼ばれたことがあります。自由学芸から機械技術へ、リベラルアーツ（自由学芸）からメカニカルアーツ（機械技術）へと知の布置転換が起こります。その一番のきっかけというか集大成になったのはディドロとドランベールによる啓蒙主義の主張が集約された百科全書です。『百科全書、または学問・芸術・工芸の合理的辞典』というのが正式なタイトルです。メティエという工芸が含まれていることは、それまでの学問的伝統からすると目を引くところなのですが、その序言の中に「全ての部門と全ての学問における人間的知識の努力の一般的展望を行う」のがこのエンツィクロペディー（百科全書）の目標だと書いてあります。ところが、百科全書の序論、これはドランベールが書いたものだったと思いますが、そこでリベラルアーツとメカニカルアーツが対比されて、いわばヒエラルヒーの逆転を行おうという意図が明確に述べられています。

「自由学芸が機械技術の上に有する優越性は—それは前者が精神に課する労働とそれに秀でることの困難さによるものだが—後者のほとんどが私たちに得させるはるかにまさる有用性によって十分に相殺される。(略) 私たちのために時計の円錐滑車・がんぎ・鳴鐘装置を発明してくれた人々が、なぜ代数を完成すべく次々に努力してきた人々と同様に尊敬されないのか。」(『百科全書』桑原武夫ほか訳、岩波文庫)

ダランベールは当時の常識にいわば異を唱えているわけです。はじめに述べたアリストテレスの学問分類によれば、テオーリア、プラクシス、ポイエーシスというのは、これは学問の価値序列というかヒエラルヒーを表すものだったのですが、ここでは時計の円錐滑車、がんぎ、鳴鐘装置を発明してくれた人々というのは当然、ポイエーシスないしはテクネーに入りますから、そういう学問の価値、秩序をむしろ転倒しようという意図がかなり明確に表明されたと考えることができます。

戦前の哲学者ですが、三木清（1897～1945）の書いた『技術哲学』は、こんにち読んでかなり技術の性格というものを考えるときに色々なヒントを与えてくれます。技術というのは単独に発明されたり発見されたりするものではなくて、あくまでも社会的な関係の中で技術というものが成立するのだということを非常に明確に述べています。

「技術は社会的諸関係の中に入り組んで存在するものである。かようなものとして技術は、社会が自己自身に与える組織である制度の性質をもっている。（中略）諸技術も社会の道具として、社会という身体、社会的身体ともいふべきものにおいて支えられている。社会も或る身体的なものである。それが身体的なものであるところから技術の制度的性質も考えられるのである。」

技術を一種の社会的制度として捉えるという見方は、先ほどの『百科全書』の考え方も通ずるところがあるわけですが、さらに次のように述べています。

「技術は社会的身体の器官と見られるようなものである。社会的諸関係から離れて純粋な技術そのものという如きものを考えることは抽象的である。」

「技術の害悪が語られる場合、その技術を支配すべき他の技術の存在が忘れられている。いわゆる技術的時代の悲劇は、技術は単に自然科学的技術のみでなく社会技術というものが存在するという事、両者の間には因果的に密接な関係があること、従って諸技術の間に正しい目的・手段の自律的・依存的関係が樹立されねばならぬことを理解しないところにある。」

「特に自然科学的技術のほかに社会技術即ち社会科学を基礎とする技術が存している。」

こんにちは JST の社会技術研究開発センターというのがありますが、社会技術という言葉は既に戦前に三木清がこういう形で使っているということを紹介しておきます。

## スローサイエンス

私は前からスローサイエンスということを書いてきたのですが、それからすれば当然、自然科学のほうはファストサイエンスということになります。これはファストフードとスローフードの対比を念頭においてのことですが、なぜ自然科学をファストサイエンスと呼ぶかと言うと、有用性とそれから効率性を追求するからです。簡単に言えば市場価値のあるものをつくり出すのが自然科学です。それから知の流通速度が極めて速いので、その意味でもファストです。つまり現在では自然科学の論文の評価というのはサイテーション・インデックスによる引用頻度と発表媒体のインパクト・ファクターで数値評価がなされるということになっています。それからすると、自然科学の論文というのは、だいたい2年から3年で引用頻度は急激に落ちます。一番激しいのは生命科学だと言われています。一方、人文社会科学の場合には2年、3年ではまだ評価が定まらないのです。最近では、心理学や社会学では雑誌論文で勝負するという流れが出てきていますが、哲史文と言われる哲学、歴史学、文学では論文は評価されません。1冊の本、著作にまとまらないと評価されないのです。しかもそれは机の上に立たないと駄目だという評価基準があり、そういう意味でもスローサイエンスというか、評価が定着するまでには人文社会科学のほう自然科学に比べてはるかに時間的なスパンが長いということです。

もともと人文学（ヒューマニティーズ、**Humanities**）というのは市場価値には還元できない人間性の探究です。リテラエ・フマニオーレス（**litterae humaniores**）という言葉がありますが、これはルネサンス時代に人間らしい学芸を指す言葉として使われていました。それが英語でヒューマニティーズになったわけですが、いわば手間暇をかけた学問の熟成です。その意味ではスローフードと通じますし、それから既成の価値の問い直しと組み替えを行う、これはスローライフのほうに通ずるだろうと思います。ですから、ある1つの目的が決まっていれば、それに対してどういう手段を考えるかというのは、これは自然科学が最も得意とするところです。人文社会科学の役割というのは、その目標が果たして人間にとって

プラスなのかマイナスなのかを考えるとところにあるのではないかと思います。つまり、いったん目標が決まれば、あとは自然科学が支配する世界になりますが、その目標を決める、目的を設定するところまでがむしろ人文社会科学の役目ではないかと思います。そこには既成の価値を問い直し、さらに価値観を組み替えるという作業が伴わなければなりません。その意味でも人文社会科学というのは時間がかかる、スローサイエンスだと私自身は考えています。

スローサイエンスとしての人文学ということは、私が言ったのではなくて、昔からそれに類することは言われていました。ギリシア哲学の大家である斎藤忍随先生が、「閑暇な学問」（1971年）ということを書かれていますが、閑暇というのはスコレー（暇）です。アリストテレスは『形而上学』の冒頭で、学問というものはスコレーがなければ成り立たないと言っています。スコレーがその後、スコラになってスクールになりますが、最近のスクールは忙しくなって、とても閑暇どころではありません。斎藤先生は次のように言っています。

「もし人間に閑暇な活動があるとすれば、それは直接の効用を目的としない活動であるはずで、この哲学者は、学問だけをそういう活動と考えた。・・・アリストテレスの、この考えがただちに現在に通用するか、どうか、疑問であろう。・・・学問にも技術化の要求がきびしく、直接、何かの役に立たないような知識が学問とは見なされない傾向は非常に強い。けれども、少なくとも文学部の学問だけは例外的な、反時代的学問ではないだろうか。」（『幾度もソクラテスの名をⅡ』みすず書房、1986）

その学問の技術化が行き着くところ、文学部廃止論が出ているというのが現在の状況だと思われる。

## 人文学の役割

小栗浩先生というのはゲーテの研究者で、ゲーテ協会の会長を務められていた方ですが、エッセーの中で次のようなことを述べています。

「この頃、教育改革に携わる有識者の口から、語学教育などはテレビで自学自習させ、あとはテストで単位を認定すればよいというような意見が出されている。しかし、語学教育は技術を身につければよいだけの、脱脂乳のように味気ないものであってはなるまい。このままでは、日本の若者はよほど大切なものを知らぬままで成人してゆくのではあるまいかと気づかれるのである。」（『北窓集』、2010年）

一時期、大学の英語の先生が自分の研究分野であるシェイクスピアをテキストを使って新入生に教えているということがマスコミで叩かれたことがあります。確かに、新入生にシェイクスピアを教えるのはどうかという問題はあるとしても、大学の4年間でシェイクスピアを1行も読まない大学生が卒業するということが私は問題ではないかと思っています。ともかく今の大学の語学教育は実用化を目指し、喋れるほうへ、あるいは使えるほうへと向かっているというのが現実です。

日本学術会議の哲学委員会の委員長をやっていたときに『日本の展望』という報告書を出したのですが、その中の第1部会、人文社会科学の報告書『日本の展望—人文社会科学からの提言』（2010年）の中であらためて人文社会科学の役割を書いたことがあります。

1つは人文社会科学の役割というのは、自明と思われていること、自明の価値を問い直す批判的な思考力を養うことにあります。次に、異質の他者を理解し共感することです。最近、共感という言葉が色々なところで取り上げられていますが、その基盤になるのが他者の身にわが身を置いて考える想像力です。それと最近、レスポンシビリティ（レスポンスする能力）、つまり応答可能性というふうな訳し方が倫理学のほうでなされるようになりましたが、3つめとして、そういう応答可能性を持った対話力ということ、この3つの条件を人文社会科学の目指すべき目標として掲げたのです。これは決して自然科学を否定するものではありません。むしろ先ほどパスカルが言ったように、自然科学と人文社会科学との棲み分けと

コ・オペレーション、協働というものが現在何よりも求められているのではないかと思います。

科学リテラシーということがよく言われるようになりました。科学コミュニケーションということが重要視されているのですが、それと同時に社会文化リテラシーのほうも忘れてはならないだろうと思います。ブダペスト宣言で、社会のための科学（**Science for Society**）ということが言われ、それ以降、日本学術会議等でもその言葉がよく聞かれるわけですが、その場合の社会というのは、あくまでも人類社会のことであって国民国家ではないということ念頭に置く必要があります。日本は科学技術立国ということ掲げているわけですが、それは一国のためのものではなく、人類社会のために貢献すべきものです。ですからイノベーションというスローガンも、一国の国民経済を高めるためだけに使われてはならないと私は考えています。

それでもう一度、冒頭で取り上げた文部科学大臣の通知に戻るのですが、そこでは人文社会科学の廃止または社会的に有用な分野への転換ということだけが強調されましたが、よく読んでみると割と良いことも言っているのです。最初に国立大学の使命というセクションがあるのですが、そこでは社会・経済的な観点からの需要は必ずしも多くはないが、重要な学問分野の継承がなされる必要があるということがきちんと述べられています。人文学の中でもあまり役に立たないと思われている哲史文、哲学、歴史学、文学は、需要は必ずしも多くはないが重要な学問としてきちんと継承されねばならないということを言っています。また、中ほどに大学の研究等の質の向上等というセクションがあり、そこには、学部・大学院それぞれにおける教養教育のポリシーを明確にし、更なる充実に努めることとすると書かれています。これまで教養教育というのは当然1~2年生に教育すべきものと考えられていたのですが、ここには大学院も入っているのです。文部科学省の文書を全て調べたわけではありませんが、私が記憶する限りでは大学院の教養教育ということに言及した文書はこれが初めてではないかと思います。

それでは大学院における教養教育とはどういうことを考えなければならないのかということになりますが、もともとリベラルアーツというのは、文系の学問3科と、理系の学問4科が文理連携というか両方の密接な連携のもとに成り立っている学問体系です。その意味では、文系に対しては理系の教養を、理系に対しては文系の教養を身に付けさせるような学科

編成をするのがリベラルアーツのもともとの原義だと考えることができます。最近では文系のための科学リテラシーということが言われますが、確かにいかに文系といえども科学的な思考法と自然界の仕組みを理解することが最低限の教養、知識として必要だろうと思います。

もう一方では、やはり理系のための社会文化リテラシーというものが必要で、自分の研究を取り巻く社会制度と文化的背景をきちんと理解しておくことが必要だろうと思います。自分の研究の展開や、それが社会に受け入れられるべき前提となるということでは、社会文化リテラシーというものを理系の大学院生に教える必要があると私は考えています。実際、大阪大学のコミュニケーションデザイン・センターが、理系の大学院生に社会文化リテラシーが必要だということで行っている授業を、NHK テレビの「日本版白熱教室」というタイトルでやっていました。確か牛海綿状脳症（BSE）、いわゆる狂牛病が問題になったときのイギリスの専門委員会や政府の対応ということが話題として取り上げられていましたが、そういう両面のリテラシーということが必要な時代に入っています。

エドワード・サイード（1935～2003）というパレスチナ生まれでコロンビア大学教授の比較文学者がいます。さまざまな活動で知られていますが、『人文学と批評の使命』（村山敏勝・三宅敦子訳、岩波書店、2006）という本の中で、次のように述べています。

「現代の人文学者にとりわけ求められるのは、多様な世界と伝統の複雑な相互作用についての感覚を養うこと、そして属しつつ距離を置き、受容しつつ抵抗するという、避けがたい組み合わせだ。人文学者に課せられた仕事は、ただある地位や場所を占め、どこかに属することではなく、むしろ自分の社会や誰か他の社会や<他者>の世界で問題になっている広く流布した考えや価値観に対して、インサイダーでありかつアウトサイダーであることだ。」

これはきわめて的確に人文学の立ち位置を示唆した言葉だと思います。

## 結びに代えて

先ほど両面と言いましたが、インサイダーでありつつアウトサイダーであるという、そういう立ち位置、それが現在、人文学に求められていることではないかと思えます。

それは、決して新しいことではありません。19世紀にジョン・スチュアート・ミルがセント・アンドルーズ大学の名誉学長に推挙されたときの就任演説で次のようなことを述べています。

「たとえ人生は短く、しかも仕事でも思索でも喜びでもないことに浪費する時間ゆえに人生がさらに短くなるとしても、人文系の学者が自分たちの住む世界の自然法則や特性についてまったく無知になれるほど、また科学者が詩的情操と芸術的教養を欠いてしまうほど、我々の精神はそんなに貧弱ではありません。」

現在は岩波文庫に『大学教育について』（竹内一誠訳）というタイトルで翻訳が出ていますが、まさに現在必要なのはそういう2つの側面の調和というか、人文的教養と科学リテラシーとが調和するような方向を、人文社会科学としても目指すべき目標として掲げるべきであろうと私自身は考えています。

## プロフィール

野家 啓一 (のえ けいいち)

東北大学教養教育院総長特命教授／東北大学名誉教授。

1949年生。東北大学教養教育院総長特命教授、東北大学名誉教授。東京大学大学院理学系研究科（科学史・科学基礎論）博士課程中退。南山大学専任講師、プリンストン大学客員研究員、東北大学文学部長、附属図書館長、理事・副学長などを経て現職。近代科学の成立と展開のプロセスを、科学方法論の変遷や理論転換の構造などに焦点を合わせて研究している。また、フッサールの現象学とウィトゲンシュタインの後期哲学との方法的対話を試みている。現在の専門分野は、哲学・科学基礎論。

社会技術レポートは、国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センターが不定期に発行しているものです。本レポートの複写、転載、引用にあたっては、社会技術研究開発センターにお問い合わせください。

## 科学技術と知の精神文化

講演録 39-1

### 人文学のための弁明（アポロギア）

東北大学教養教育院総長特命教授  
東北大学名誉教授

野家 啓一

---

国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター  
〒102-8666 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザビル 4 階

TEL 03-5214-0130  
FAX 03-5214-0140  
URL <http://ristex.jst.go.jp/>  
2017年4月

Copyright©2016 JST 社会技術研究開発センター